

4 編年 (第13図)

筆者が1997年に提示した編年案をもとに、前章までで述べた層位的上下関係、類似石器群の状況をふまえたうえで、改めて編年案を提示したい。なお、前回の編年との相違点は、新たな資料の追加により、より詳細な石器組成が判明したこと、石器製作技術の観点を設けたこと、前回部分的にしか追えなかった各器種ごとの系統を追ったことの3点である。基本的な時期区分についての変更点はないが、前回Ⅵ期の小型のナイフ形石器と台形石器の時期的な位置づけについて留保していたが、系統が追えたことで今回は同じ時期として扱っている。

(1) Ⅱ期

① 石器組成

Ⅱ期については追加資料が見られないため、前回の論の繰り返しとなる。仁田尾遺跡が該当し、狸谷型ナイフ形石器に代表される切出形ナイフ形石器を指標とする時期である。石器組成について、ナイフ形石器や台形石器は多く見られるが、剥片尖頭器、三稜尖頭器の組成は客体的である(宮田1996)。

② 石器製作技術

仁田尾遺跡の本報告がなく、石核等が分析できないので、ここでは述べられないが、ナイフ形石器の素材に用いられる寸詰まり剥片を剥出する技術と剥片尖頭器の素材に用いられる縦長剥片を連続して剥出する技術の2通りがみられるようである。

(2) Ⅲ期

① 石器組成

石器組成はⅡ期と比較すると剥片尖頭器が多く見られるようになり、器種組成が非常に豊富となる。三稜尖頭器は比較的大型のものがみられるのが特徴的である。小牧3A遺跡、宮ヶ迫遺跡では本県特有の粘板岩製の両面加工尖頭器が見られる。ナイフ形石器についてみると、帖地遺跡や郡山遺跡では瀬戸内技法に類する横剥ぎのナイフ形石器が見られ、この時期に何らかの形での瀬戸内技法との接触が考えられる。宮ヶ迫遺跡や帖地遺跡では、今峠型ナイフ形石器も見られる。また、小牧3A遺跡では基部加工のナイフがみられ、ナイフ形石器の形態も多様である。台形石器、切出形ナイフ形石器は安定して組成され、両石器の製作技術的基盤は類似する⁷⁾。宮ヶ迫遺跡、小牧3A遺跡、帖地遺跡XⅣ層、前山遺跡Ⅷ層石器群が該当する。

② 石器製作技術

a. 剥片尖頭器・石清水型削器

本県では縦長剥片剥離の石核の出土が未だみられないため、製品、剥片からのみの観察となる。

基本的には石核から縦長剥片を連続して剥離する。縦長剥片という形状の性質上、背面に稜を取り込むことが重要であるため、打面を90度に移動することはあまりみられない。結果単設打面石核を基本とし、稀に両設打面の石核よ

り剥離されたものがある。Ⅱ期から観察できる技術であるが、Ⅲ期になると石器の量から見ても豊富に用いられている。

石清水型削器は剥片尖頭器を生産する過程で生じる縦長剥片を利用している場合が多いようである。

ナイフ形石器と剥片尖頭器の素材の関係については、宮ヶ迫遺跡の分析から、2cm前後の比較的幅の狭い剥片はナイフ形石器に、2.5～4cmの幅の剥片は剥片尖頭器に利用する傾向があるようである。

石材は非黒曜石を利用している。

b. 台形石器・切出形ナイフ形石器

接合による検証は出来ないが、同一ブロック内からの出土と考えられる残核と製品の関係から宮ヶ迫遺跡の報告書中で検討した例があり、それを中心に記述を行う。

まず、石器の規格に応じた石核を準備する。石核は単設・両設・打面転移石核・球心状と多様である。剥離された剥片の利用方向は、打面に対して直交するフェザーエンドを利用する横位利用を基本とし、打面に平行なフェザーエンドを利用する縦位利用もみられる。基本的に石材に応じた製作技術の変化は認められないが、南薩地域では玉髓等堅い石材を使用する頻度が高く、その結果剥片剥出の際の打面転移技術の頻度が高いといえる。

c. 国府系ナイフ形石器

現在のところ製品の出土しか報告がないため石核、接合資料による観察は出来ない。製品の観察からは、打面調整により打面を八の字状に形成し、八の字打面の頂部から横剥ぎのいわゆる翼状剥片を剥出し、最後に腹面側から(稀に背面から)のブランディングを施すという工程である。郡山遺跡のナイフは底面も持つため石核は板状であることが推測されるが、底面を持たない帖地遺跡XⅣ層のナイフについては板状石核から剥離されたとは言い切れない。本県の事例は、石器が非常に小型であること、石材が在地のものを利用していること、底面を持たないものがあること等から考えると、純粋な瀬戸内技法とは若干異なると考えられる。

d. 今峠型ナイフ形石器

帖地遺跡、宮ヶ迫遺跡で出土している。今峠型ナイフ形石器については鎌田洋昭の詳細な分析があるため、その分析を引用し、Ⅲ～Ⅴ期までまとめて述べておきたい(鎌田1999)。鎌田の分析に当てはめると、西丸尾遺跡のナイフはⅠ-a類、帖地遺跡XⅣ、XⅢ層、宮ヶ迫遺跡のナイフはⅠ-b類に分類される。前者は「石核素材に厚みのある剥片や分割礫を用い、石核素材の主要剥離面やポジティブな分割面を剥片剥離作業面や石核の底面付近に設定し、「ノ」の字形剥片あるいは横長剥片を剥離する」技術である。後者は前者の「技術を基盤とし剥離作業が進行した石核から剥離された可能性が考えられる。」ということである。詳細については鎌田の論文を参考にされたい。なお、瀬戸内技